

## 暑さとも戦う選手

# 一字一筆

静岡の今

長かった今年の梅雨が明けた。日照時間が短く、気温が上がらない「梅雨寒」が続いたが、梅雨明けと同時に、真夏の暑さがやってきました。天気予報ではしばしば「災害級」という言葉も使われ、「熱中症」対策が

日常生活の中でも求められている。まして野外のスポーツでは、選手の健康が出发点という論議が改めて問われている。

真夏の炎天下でのスポーツを代表する第101回全国高校野球選手権大会が6日、開幕した。先だつ静岡大会では、長時間グラウンドに立つ開会式の途中に「給水タイム」が取られ、

選手たちはポケットのペットボトルで水分補給した。試合日程には「休養日」が設けられ、決勝戦は午前10時開始にするなどの熱中症対策が取られた。

連日、大観衆で埋まる阪神甲子園球場では、応援団用に日よけテントや扇風機が設置され、エアコンやミスト噴霧器が稼働する場所も設けられた。

甲子園の暑さは、筆者も2度の体験がある。63年前、今年の静岡県代表・静岡高校在校生応援団として、44年前には朝日新聞記者として大会取材した。応援用うちわと甲子園名物の「かち割り氷」でうだる暑さをしのいだ。それぞれ、青春と記者人生の思い出である。

来年の東京オリンピックの暑さ対策も気になる。開催期間の2020年7月24日から8月9日までは、ちょうど今年の猛暑期間と重なる。女子マラソン（8月2日）や男子マラソン（8月9日）は早朝スタートになるようだが、選手や沿道の観衆の暑さ対策が心配だ。

暦では「立秋」（8日）が過ぎ、中旬のお盆休みには恒例の「民族大移動」も始まる。それぞれの故郷では地域の歴史や伝統を受け継ぐ祭りが待ち、家の間口や玄関先では祖霊の「迎え火」や「送り火」も見られる。

猛暑の中でも、人は故郷に向かい、甲子園に故郷を探す。

（前静岡県監査委員・富永久雄）



盆の送り火＝沼津市、全日写連・神尾一さん撮影